

## 会津物語

②1

話者・菅家清一さん(79)

＝昭和村大岐

## 背中の料理、キツネに喰われ

およそ100年前。明治が終わるころのことだ。

本村の小野川は昭和村のカミ(上流)にある。大岐は、江戸時代ずっと7軒だけでやってきたが明治時代になって1軒新宅を出した。新宅を出した本家は勝衛爺。その勝衛爺が、4里ほどシモ(下流)の、西山の五疊敷の祝言(婚礼)によばれて行った。昔の祝言は春の農作業がはじまる前、早春の堅雪の頃にやっていた。勝衛爺は1人で歩いて五疊敷まで行った。

祝言が終わって、西山の五疊敷からの帰りは、砂子原、黒沢、青中、芋小屋、大成沢から琵琶首を通って、木地屋の下平集落を過ぎれば大岐はすぐだ。下平と、いまの境ノ沢の間にあるバツケ沢から深沢への道は沢が深く、木が谷を覆って道も真っ暗だ。きんびゃわりいど(気味

## 祝言の帰り道

の悪い所)だった。しかしバツケ松まで来れば大岐はすぐだ。

しかしこの沢で、勝衛爺はキツネに馬鹿されて背中のツトに入れた料理を、みな喰わっちゃあだ(喰われた)。ごく最近まで「よばれ」(宴席)で出るお膳には手を付けずに、料理を家人のために持ち帰ったものだ。よばれた人は餅と豆腐の吸い物だけ食い、あとはワラで作ったツト

に料理を入れて背負って帰った。ツトってのは、納豆など作る時のものと同じ形状のものだ。

俺は、まだ、ちっちゃくて小学校に出る前だったが、勝衛爺がおらい(我が家)に来て、よく語り語りしたあだ。その話聞いて「勝衛爺は祝言さ行ってきて酒飲んできてツトをほろった(落とした)のや」って言ううと、勝衛爺は「そんね(違つ)、ホントにキツネに背負ったツトを取られて喰わっちゃあだ」って、何度もゆいゆいした(言った)。

(構成は会津学研究会・菅家博昭)



絵・所天助